

継がなくてゴメンナサイ！



年に1回は岩手から上京し、セガレマーケットに参加しているリンゴ農家の及川務さん(左)と3月20日、東京・自由が丘で

「女性はセガール」
「親孝行いかげんがつかずか」
日曜の昼下がりに、東京都江東区有明のスポーツ施設駐車場では野菜が並ぶイベントで、背中に「伴(せがれ)」とプリントされた水色Tシャツ姿の若者たちが声を張り上げていた。近くのマンションの住民が通りかかると「これ、うちのおやじが作ったんですよ」とセガールストーク。毎月、東京近郊でセガレが開催する「セガレマーケット」は活気にあふれている。代表の児玉光史さん

「(31)は長野県上田市のアスパラガス農家の長男。東大入学と同時に上京し、野球部の4番打者として活躍した。卒業後はIT会社で働きつつ、家を継がない後継めたさを感じながら、農業がテーマのカルチャースクールに通い始めた。2007年、同じ悩みを持つ同世代の2人と出会い、セガレを結成した。現在のメンバーは約50人。男性はセガレ、女性はセガールと呼んでいる。活動は幅広い。「セガレ」リスト「シャパン」を企画したり、セガレとして農作業体験ツアーを企画したり、セガレとして農地の相続問題について勉強会も開く。

農家のセガレが親孝行

東京で見つけた第3の道

▽農業の人材育成に詳しい格に、とんがりがちだが、自分のでき本格的な参入を前押ししている農学博士(北海道江別市)・長谷川豊特任教授の話。農家を継いことだ。また、農業をやりたい「役」が体験指導や販売をすれど、10・20年実家を継といろいろ人は多いが、各地の行政は、より多くの人が農業に参加していた子どもが痛めてきて急の窓口「担い手支援センター」はで。



「つてみる」とケンカしたのがきっかけで、妻のスタイリスト千早さん(36)と協力し、おしゃれなパッケージを制作した。「1年やって、リピーターもついてきた。生産者のスペシャリストになれなくても、プロモーションはできる」と表現

「自分らしさ表現」
農業に誇りを持ってたという声もある。「昔は農家の息子と言われると、カッコ悪い気がして…」と話すのは、岩手県一関市(写真左から)「セガレマーケット」で日本酒「オヤシナカセ」を見せるセガレ代表さん、盛況に笑顔を見せるセガレ代表さん・児玉光史さん、ニンニクをイメージした帽子をかぶり商品をアピールする野月隆志さん＝東京・有明で

同志が集い実家の作物販売会や農業体験ツアーなど開催

市のリンゴ農家及川務さん(31)。家を継いだ立場でセガレに参加し、リンゴやジャガイモを売っている。「同世代が仲間となりがちで、農家に向かい合っているのが新鮮で、いいなあ。今は自分らしさを出せる仕事だと思ってます」
かわいいうらやちやちやシは、東京の広告代理店で働く妹の和子さん(28)がデザインした。「例えば自由が丘みたいなおしゃれな街だと、ラベルやパッケージもこだわらないと売れない」と和子さん。務さんは「田舎にいたら思いつかないアイデアばかりで、刺激になる。リンゴを一生懸命作るだけじゃだめだわかった」。リンゴを買った客が通販を申し込むことも多いという。

生産者のスペシャリストになれなくても、プロモーションはできる
青森県十和田市のニンニク農家出身のウェブデザイナー野月隆志(37)と意気投合し、それぞれの実家を継ぎ込んだ日本酒を企画。5月に発売したその名も「オヤシナカセ」は、茨城県酒造組合の新酒鑑評会で金賞を受賞した。名古屋さんは「家を継いでないという自虐的な意味で、親孝行でうれし泣きさせるという意味を込めました。父の日のプレゼントにぴったりでしょう」と笑う。名古屋さんの父親数さん(65)も「おもしろい息子を持った」と笑顔で、セガレに白旗だ。

「継ぐか継がないかという二者択一ではなく、何か一私にもできることがある」と思ってもらうことが大事」と児玉さん。ゆるやかなつながりが、農業の将来を支える人材を生むかもしれない。

